

自由意志の現在——E・J・ロウの新しいリバタリアニズムの検討

オーガナイザ：海田大輔（京都大学）

提題者：

高崎将平（東京大学）：「リバタリアニズムの概況と課題」

山口 尚（京都大学）：「運論証に対するロウの応答」

海田大輔（京都大学）：「心的因果は不可視的であるか」

「自由意志と決定論」の問題は古くて新しい。それは、長い考究の歴史をもつ一方で、つねに最新の学術的知見をふまえて再考されている。本ワークショップでは、いわゆる「リバタリアニズム」の新たなタイプである、E・J・ロウの「personal agency 理論」を検討する。リバタリアニズムとは、自由意志の存在が決定論と両立可能でないことを主張すると同時に、私たちが自由意志をもつことを肯定する立場である。こうした見解の歴史は古く、すでにさまざまなヴァージョンが提唱されており（代表的なものを挙げれば、チザムやオコナーが擁護する「行為者因果説」、ギネットが擁護する「非因果説」、ケインが擁護する自然主義的なリバタリアニズムなど）、それぞれの見方の利点と欠点も詳細に検討されている。ロウが近年発表した理論は、従来のリバタリアニズムが直面した（少なくともいくつかの）問題を解決・回避できるよう構築されており、それが成功しているのか、従来の問題へふたたび直面するのか、あるいは新たな問題を招来するのかということは検討に値する。

ここで、両立論に魅力を感じているオーディエンスに、「なぜ今リバタリアニズムなのか」ということを説明しておく必要があるかもしれない。リバタリアニズムの理論を構築する動機づけのひとつに、「はたして両立論的な自由意志が道徳的責任や非難可能性を基礎づけうるのかということについて、いまだコンセンサスがとれていない」という状況がある。たとえば、いわゆる「堅い決定論者」は、両立論的な自由はそうしたものの基礎としてはまったく不十分であると批判する。こうした現状において、擁護可能なリバタリアニズムの理論を構築することは、道徳的責任や非難可能性の基礎づけのための重要な選択肢になりうる。「擁護可能な（かつ、じっさいに正しい）リバタリアニズムの立場は存在するのか」という問いは、両立論者も関心をもちうる問いであると言えよう。本ワークショップも、ロウの新しい立場の検討を通じて、はたしてリバタリアニズムは可能なのかという一般的論点に関する考察を深めることを目指したい。

各発表の概要は以下のとおりである。まず、高崎は、全体のイントロダクションとして、現代の自由論におけるリバタリアニズムの議論状況を概観した上で、ロウの立場をその中に位置づけ、どのような点でロウのリバタリアニズムが「新しい」のかを明らかにする。つづいて、山口は、「運論証」への応答の仕方に焦点を絞りつつ、ロウのリバタリアニズムの利点と欠点を明らかにする。最後に、海田は、ロウの非デカルト的実体二元論および彼の心的因果に関する見解を検討し、それらを彼のリバタリアニズムと整合的に理解する道筋を示す。